

フェロー語バラッド *Ívint Herintsson* の 3バージョンとノルウェー語バラッド *Kvikkjessprakk*¹⁾

The Three Versions of the Faroese Ballad Cycle *Ívint Herintsson*
and the Norwegian Ballad *Kvikkjessprakk*

林 邦 彦

要 旨

フェロー語によって今日まで伝承されている多数のバラッドの中に、*Ívint Herintsson* と呼ばれる、アーサー王伝説に題材を取ったと考えられる作品がある。この作品は18世紀後半から19世紀半ばにかけて、一般にA, B, Cと呼ばれる3つのバージョンが採録されており、これらはいずれも複数のバラッドから構成されるバラッド・サイクルである。本作品の先行研究ではしばしば物語の素材に焦点が当てられたが、本稿ではこの作品の3バージョン間の異同に着目し、個々のバージョンの形が生成・伝承された過程を浮き彫りにすることを旨とし、バラッド・サイクルとしての本作品を構成する複数のバラッドのうち、まずは*Kvikilsprang*と題されたバラッドを対象を絞り、*Kvikilsprang*の3バージョン間の比較を行い、3バージョン間で見られた主な異同箇所について、*Kvikilsprang*と同じ題材を扱ったノルウェー語バラッド*Kvikkjessprakk*の該当箇所とも比較を行う。

キーワード

アーサー王物語、フェロー語バラッド、*Ívint Herintsson*
ノルウェー語バラッド、*Kvikkjessprakk*

1. はじめに

今日、フェロー諸島、およびデンマークの一部の地域で使用されているフェロー語によって今日まで伝承されている多数のバラッドの中に、*Ívint Herintsson*²⁾ と呼ばれる、アーサー王伝説に題材を取ったと考えられる作品がある。この作品は18世紀後半から19世紀半ばにかけて、一般にA, B, Cと呼ばれる3つのヴァージョンが採録されている³⁾。いずれのヴァージョンも複数のバラッドから構成されるバラッド・サイクルで、作品の大筋は3ヴァージョン間で共通している。バラッド・サイクル全体は、Aヴァージョンでは下記の計5つのバラッドから構成されている：

I. *Jákimann kongur* 「ヨアチマン王」(80スタンザ)：

表題になっている騎士 *Ívint Herintsson* の父 *Herint* の求婚と結婚。

II. *Kvikilsprang* 「クヴィチルスプラング」(60スタンザ)：

Herint に生まれた3人の息子 (*Ívint*, *Víðferð*, *Kvikilsprang*) のうちの *Kvikilsprang* と *Ívint* の冒険。

III. *Ívints táttur* 「ウイヴィントのバラッド」(80スタンザ)：

Ívint の弟 *Brandur* (*Brandur hin víðförli*。前出の *Herint* の二男 *Víðferð* と同一人物か?) および *Ívint* の冒険。

IV. *Galiens táttur fyrri* 「ゲアリ안의バラッド 第一部」(100スタンザ)：

Ívint の発病と快復、およびその間に挟まる形で描かれる、*Ívint* の息子 *Galian* の誕生と成長。

V. *Galiens táttur seinni* 「ゲアリアンのバラッド 第二部」(60スタンザ) :
Galianの冒険に焦点が当てられ、クライマックスでGalianの一騎打ち
の相手としてÍvintが登場。

このÍvintの父Herintが求婚して結ばれた相手の兄が、アーサー王のこと
と考えられるHartan王である。なお、Ⅲの *Ívints táttur* はAバージョン
にしか含まれておらず、Ⅳの *Galiens táttur fyrri* とⅤの *Galiens táttur
seinni* についてはBバージョンではこの2バラッドの内容が1つのバ
ラッドに統合されてⅢ. *Galiens táttur* と表記され⁴⁾、Cバージョンで
はAバージョンのⅣとⅤの内容を扱うⅢ. *Galiants kvæði* か⁵⁾ (Ⅰ)⁵⁾、Ⅱ、
Ⅲに分かれている⁶⁾。

また、本作品の内容にはノルウェー語バラッドの *Kvikkjessprakk*⁷⁾ および
*Iven Erningsson*⁸⁾ と呼ばれる作品とそれぞれ題材の共通する部分が存在し、
本作とこれらノルウェー語作品との関連が指摘されている。*Kvikkjessprakk*
はⅡの *Kvikilsprang* と共通の題材を扱ったもので、*Iven Erningsson* では、
Ⅳの *Galiens táttur fyrri* とⅤの *Galiens táttur seinni* に該当する内容が扱わ
れている。

本稿で中心的に扱うのはフェロー語バラッド *Ívint Herintsson* である。
Ívint Herintsson を扱った先行研究ではしばしば物語の素材に焦点が当てら
れたが⁹⁾、本稿ではこの作品の3バージョン間の異同に着目したい。本
作品に関し、Brandur およびÍvintの冒険を描いた *Ívints táttur* がAヴァー
ジョンにしか存在しない点を除けば、先行研究でこの作品の3ヴァー
ジョン間の異同を取り上げているのはLiestøl (1915)¹⁰⁾ のみである。しかし、
本作品の3バージョン間にはまだLiestøl (1915) が指摘していない異同
箇所が多くあり、中には特定のバージョンを性格付けるほどの大きな特
徴となるものも見受けられる。本稿では *Ívint Herintsson* の3ヴァー

ン間の異同を明らかにした上で、最終的には個々のヴァージョンの形が生成および伝承された過程を浮き彫りにすることを目指し、まずは、バラッド・サイクルとしての本作を構成する複数のバラッドのうち、サイクルの前半に位置し、題材の共通するノルウェー語バラッドが遺されているⅡの *Kvikilsprang* に対象を絞り、フェロー語バラッド3ヴァージョン間の比較を行うと同時に、3ヴァージョン間の特に主だった異同箇所について、同じ題材を扱ったノルウェー語バラッド *Kvikjesprakk* の該当箇所とも比較を行いたい。

2. *Kvikilsprang*に見られる3ヴァージョン間の相違と ノルウェー語バラッド

2.1. *Kvikilsprang*の梗概

以下が *Kvikilsprang* の梗概である。ここでは代表としてAヴァージョンを用いる：

HerintとHartan王の妹の間には3人の息子Ívint, Viðferð, Kvikilsprangが生まれる。三男のKvikilsprangはGirtlandへ行くが、捕らわれの身になる。Girtland王の娘Rósinreyðは父王にKvikilsprangを自分に与えるよう懇願するが、父王は拒否。RósinreyðはÍvintに救援に来てもらうべく彼に使いを送る。事情を知ったÍvintはGirtlandへ向かい、Kvikilsprangを救出。翌日、2人はGirtland王やその軍勢と戦い、ÍvintはGirtland王を斃す。KvikilsprangはRósinreyðと結ばれ、Girtlandの王位に就く。

2.2. *Kvikilsprang*の3ヴァージョン間に見られる異同の先行研究による 指摘

*Kvikilsprang*の3ヴァージョン間の異同として、Liestøl (1915) は以下の

点を指摘している：

1. 捕らわれの身になった *Kvikilsprang* の救出のため *Girtland* から *Ívint* のもとへ向かう小姓は AB 両バージョンでは海を渡り、海上では悪天候に遭遇する様が描かれるが、Cバージョンでは

(1) *Fimur var hann á fótunum, / sum boðini skuldi bera,*

伝言を伝える者は敏捷な者であった。(Cバージョン, II, 第13スタンザ, 1-2行, 234頁)¹¹⁾

と記され、連絡を受けた *Ívint* と彼の臣下の者達も馬で *Girtland* へ赴く。
(Liestøl 1915: 166)

2. クライマックスで、*Kvikilsprang* や *Ívint* らが *Girtland* 側の戦士達と戦った結果、*Girtland* 側で王の他に生き残った戦士の数は、Aバージョンでは12人であるが、Cでは3人である。Bバージョンではこの点に関する記述はない。(Liestøl 1915: 166)

3. 上記のクライマックスでの戦いの末、Bバージョンでは *Girtland* 王は *Kvikilsprang* に娘と国の半分を差し出し、Bバージョンではここで *Kvikilsprang* が終わっている。(Liestøl 1915: 166-167)

以上が、フェロー語バラッド・サイクル *Ívint Herintsson* の3バージョン間の異同として Liestøl (1915) が取り上げている点の中で、*Kvikilsprang* に関わるものである。しかし、*Kvikilsprang* の3バージョン間には他にも異同箇所は存在し、また、Liestøl (1915) は *Kvikilsprang* におけるもの

に限らず、バラッド・サイクル全体でも *Ívint Herintsson* の3バージョン間で見られる異同について、Vの *Galiens táttur seinni* の冒頭部分の1カ所を除き¹²⁾、それぞれ *Ívint Herintsson* の一部分と題材の共通するノルウェー語バラッド2作品との比較までは行っていない。

そこで以下、*Kvikilsprang* の3バージョン間の比較によって明らかとなる異同箇所のうち、主だったものをプロット上の順番に取り上げ、ノルウェー語バラッド *Kvikjesprakk* における該当箇所とも比較してゆきたい。最初に取り上げる2点は先行研究では未指摘の点である。

2.3. *Kvikilsprang* の3バージョン間の異同とノルウェー語バラッド *Kvikjesprakk*

2.3.1. *Kvikilsprang* による求婚の台詞の有無

まず1点目は *Kvikilsprang* の冒頭部分である。*Kvikilsprang* は Girtland へ赴くも投獄され、兄の *Ívint* が助けに行くことになるが、Aバージョンでは *Kvikilsprang* が Girtland へ向かう理由として

(2) Hann vildi tað útinna

彼はそれを成し遂げるつもりだった (Aバージョン, II, 第8スタンザ, 2行, 203頁)

とあるものの、tað「それ」が指し示すものは記されておらず、Bバージョンでは *Kvikilsprang* が Girtland へ赴く理由については一切記述がない。そしてAバージョンでは先のスタンザで

(3) *Kvikilsprang leyp á gangara sín, / hann vildi tað útinna, / hann kom seg til Girtlanda, / man meg rætt um minna.*

クヴィチルスプラングは馬に飛び乗った。彼はそれを成し遂げるつもりだった。彼はギルトランドへやってきた。私の記憶が正しければ。(Aバージョン, II, 第8スタンザ, 203頁)

と記されると、次の第9スタンザでは

- (4) Hann setti seg hjá frúnni niður, / tungan mælir á ljóði, /
bráðliga varð hann av fótum kiptur, / nakkin small á gólvið.

彼はかの婦人の傍らに腰を下ろし、その舌は言葉を発した。すぐさま彼は引き倒され、床で後頭部を打った。(Aバージョン, II, 第9スタンザ, 204頁)

とあり、その後、彼は身構えて、Girtland側の者達との戦いになる(最終的には捕らえられ、牢獄に入れられる)。

Bバージョンでは第1スタンザにおいて

- (5) Nevndur er teirra triði sonur, / fáan eg veit hans maka, /
hann er yngstur av brøðrunum, / hann eitur Kvíkil spraki.

彼らの3人目の息子の名を教えよう。私は彼に匹敵する者はほとんど知らない。彼は兄弟の中でいちばん若く、クヴィチル・スプレアチという名である。(Bバージョン, II, 第1スタンザ, 222頁)

という記述があると、次の第2スタンザでは彼は既にGirtlandに到着しており、上記のAバージョンの第9スタンザとそれほど違いのない

- (6) Hann setti seg niður hjá eini moyggj, / tungan ræður at ljóða, /

snarliga varð hann av sessi kiptur, / nakkin small á gólvið.

彼はある乙女の傍に腰を下ろし、その舌からはどんどん言葉が出てきた。すぐさま彼は席から引き下ろされ、床で後頭部を打った。(Bバージョン, II, 第2スタンザ, 222頁)

という記述があり、同様にその後彼は立ち上がって身構え、Girtland側の者達との戦いが始まる。Kvikilsprangが捕らわれの身になった後、AB両バージョンでは、後述するようにいずれもGirtland王女がKvikilsprangを解放して自分に与えるよう父王に懇願し、Aバージョンでは最後にKvikilsprangとGirtland王女は結ばれる(Bバージョンにはこのような記述はない)が、上述のようにAB両バージョンではいずれもKvikilsprangがGirtlandへ赴くにあたり、その明確な理由は記されず、Girtlandに到着後、Kvikilsprangは王女と思しき女性の傍らに腰を下ろし、引き倒されて戦いに発展するという形である。

しかし、Cバージョンではこの間の記述はかなり異なっている。KvikilsprangはGirtlandに到着すると、

(7) Kvikilbragd stendur á hallargólvi, / fyrr hefur verið siður, /
hefur alt í einum orði, / heilsar og hann biður.

クヴィチルブラグドゥは広間の床に立った。かつてはこのようなきたりであった。彼はすぐに口を開き、挨拶し、お願いをした。(Cバージョン, II, 第5スタンザ, 234頁)

とあり、これに続く第6スタンザでは

(8) Kvikilbragd stendur á hallargólvi, / ber fram kvøðju sína: /

» Sit væl, reysti Girtlands kongur, / gev mær dóttur tína! «

クヴィチルブラグドゥは広間の床に立ち、挨拶をした、「権勢高きギルトランド王よ、あなた様の娘を私に頂きとうございます。」(Cバージョン, II, 第6スタンザ, 234頁)

という形で、Kvikilsprangが明確にGirtland王女への求婚の意志を王に伝える記述が存在する。そしてKvikilsprangが求婚の申し出をすると、

(9) Tóku teir unga Kvikilbragd / settu á grønan vøll,

彼らは若きクヴィチルブラグドゥを連行し、緑の平原に座らせた。

(Cバージョン, II, 第7スタンザ, 1-2行, 234頁)

とあり、その後戦闘が始まることになる。この点でもAB両バージョンとは異なる。(戦闘の末、Kvikilsprangが捕らわれの身になる点はCバージョンでも変わらない。)

ここまでがこの点をめぐるフェロー語バラッド3バージョン間の異同であるが、ノルウェー語バラッドの該当箇所ではKvikjesprakk (Kvikilsprang) はGirkland (Girtland) に到着すると、

(10) Og det var unge Kvikjesprakk, / sitt mál kunna han frambera: /

« Hev du kje, kongje, dotteri ei, / som du lyster guten å gjeva? »

若きクヴィキエスプラックは彼の用件を伝えることができた、「王様、どなたか若い者にお与えになりたいとお思いのお嬢様はいらっしゃいますか。」(第22スタンザ, 72頁)

と事実上王女への求婚を表明する。この点ではフェロー語バラッドのC

ヴァージョンと共通である。しかし、王から嘲笑されると¹³⁾、Kvikjesprakk はフェロー語バラッドの AB 両ヴァージョン同様、王女（と思しき女性）の傍に腰を下ろし、すぐに引き倒されて首筋を強打する¹⁴⁾。この「王女の傍らに腰を下ろし、すぐに引き倒されて首筋あるいは後頭部を強打する」という要素はフェロー語バラッドの C ヴァージョンにはない。

2. 3. 2. Girtland 王女 Rósinreyð の父王への直訴の有無

Kvikilsprang における 3 ヴァージョン間の異同として取り上げる 2 点目も先行研究では未指摘の点である。まず、既述のように、Girtland を訪れた *Kvikilsprang* が捕らわれの身になるのはいずれのヴァージョンにも共通であるが、AB 両ヴァージョンではそれを知った Girtland 王の娘 Rósinreyð が父王に対し、*Kvikilsprang* を解放し、自分に与えるよう直訴するが認められず、小姓を使って Ívint を呼びにやる。以下の引用 (11) および (12) がこの部分のそれぞれのヴァージョンである：

(11) » Ger tað fyrri æruna tá, / gev mær riddaran henda! «

» Ríð frá mær, tú vesælavætti, / eg vil teg ikki hoyra, /
sámir ei mínum bitra brandi / at leika í kvinnudroyra. «

» ...sendi eg sterka Ívinti boð, / tá stendur títt lív í váða. ... «

Frúgvín krevur sín brævasvein, / klæðir hann væl í skrudúr: /

» Eg havi teg so oftum roynt, / at tú hevur verið trúur.

Heilir allir mínir sveinar, / drekkið nú allir av minni, /

ongan skalt tú tær søtan sova, / fyrr enn tú Ívint finnur! «

(ロウスインレイの発言)「お父様の名誉のためでございます。私にこの騎士をいただきとうございます。」「立ち去れ、この惨めな者めが。わしはお前の言うことを聞くつもりはない。わしの鋭い剣には、女の血にまみれて戦うのは相応しくないのだ。」「……私が剛きウィヴィントにお伝えすれば、お父様のお命は大変な危険に晒されますよ。……」娘は彼女の伝令となる小姓に(ウィヴィントに伝言を伝えることを)命じ、彼に立派な衣装を着せた、「私は実際に、あなたが忠実であるのをたびたび見てきました。さあ私の小姓達皆さん、乾杯しましょう。ウィヴィントに会えるまでぐっすり眠れることはありませんからね。」(Aヴァージョン、II、第20スタンザ3-4行、第21スタンザ、第22スタンザ3-4行、第24-25スタンザ、204頁)

(12) » Ger tað fyri æru tína, / tú lat meg riddaran fá! «

» Skríð frá mær, tú vesalvættur, / meg lystir ei á at hoyra, /
sámir ei mínum bitra brandi / at røra við kvinnudroyra. «...

» ...sendi eg Ívinti sterka boð, / tá stendur títt lív í váða. «

Frúgvín tekur sín brævasvein, / hon klæðir hann væl í skrudður: /

» Eg havi ikki annað spurt, / enn tú hevur verið mær trúur.

Heilir allir mínir menn, / tær drekkið nú heilir á sinni, /

tær skuluð ongan søtan sova, / fyrr enn tær Ívint finnið! «

(ロウスインレイの発言)「お父様の名誉のためでございます。私に

この騎士をいただきとうございます。」「立ち去れ、この惨めな者めが。わしはお前の言うことを聞くつもりはない。わしの鋭い剣には、女の血に触れるのは相応しくないのだ。」……「……私が剛きウィヴィントにお伝えすれば、お父様のお命は大変な危険に晒されますよ。」娘は彼女の伝令となる小姓を捕まえ、彼に立派な衣装を着せた、「あなたは私に忠実だったことしか聞いたことはありません。さあ私の臣下の皆さん、皆で乾杯しましょう。ウィヴィントに会えるまでぐっすり眠れることはありませんからね。」(Bヴァージョン, II, 第9スタンザ3-4行, 第10スタンザ, 第12スタンザ3-4行, 第13-14スタンザ, 222頁)

しかしCではA, BのようにGirtland王の娘が父王にÍvintを解放するよう要求する場面はなく、彼女が小姓を使ってÍvintを呼びにやるとの記述もない。Kvikilsprangが獄に入れられ、彼の敵が大勢おり、彼の命が危険に晒されていることを示す一連の地の文での記述(Cヴァージョン, II, 第10-12スタンザ, 234頁)の後,

(13) Fimur var hann á fótunum, / sum boðini skuldi bera, /
hagar heim til landanna, / sum Ívint mundi vera.

Fimur var hann á fótunum, / sum boðini tá bar, /
hagar heim til landanna, / sum Ívint fyri var.

かの地からウィヴィントがいるであろう国へ伝言を伝える者は敏捷な者であった。その時、かの地からウィヴィントがいる国へ伝言を伝えた者は敏捷な者であった。(Cヴァージョン, II, 第13-14スタンザ,

234頁)

という記述があり、次の第15スタンザでは、既に *Ívint* のもとに到着していると思われる伝令が *Ívint* に対し、

(14) » *Tín bróðir á Girtlandi, / er staddur í stórum vanda, ...* «

「あなた様の弟君がギルトランドで大変な危機に陥っておられます……」(Cバージョン, II, 第15スタンザ1-2行, 234頁)

と語る場面が記されており、この間の内容はCバージョンのみがAB両バージョンとは大きく異なっている。

以上がこの点をめぐるフェロー語バラッド3バージョン間の異同であるが、この点についてはノルウェー語バラッドではCバージョンと同様、*Girklond* 王女 *Rosamund* (*Rósinreyð*) が父王に *Kvikjesprakk* の解放を要求することはなく、*Kvikjesprakk* が自ら自分の小姓のもとへ行き、

(15) « *Høyre du det, min lisle smådreng: / du springe på gangaren raude, / du bed han Iven, bro'er min, / han skundar å hevne min daude.* »

「聞くのだ、我が小姓よ、赤い馬に飛び乗るのだ。我が兄弟のイーヴェンに頼み、私の死の仇を取りに来てもらうのだ。」(第39スタンザ, 75頁)

と、小姓に *Iven* (*Ívint*) を呼んで来てもらうよう頼む形になっている。

2.3.3. 小姓と *Ívint* の移手段の相違

ここで取り上げる箇所は、フェロー語バラッド3バージョン間の異同に限っては既に *Liestøl* (1915) によって指摘されている点であるが、捕ら

われの身になった Kvikilsprang の救出のために Girtland から Ívint を呼びに
向かう小姓は AB 両ヴァージョンでは海を渡り、海上で悪天候に遭遇する
様が描かれる：

(16) So læt frúnnar brævasvein / síni skipin gera, /
allar læt hann streingirnar / av reyðargulli vera. ...

So var veður á sjónum hart, / sandur á tiljum lá, /
voldi tað frúnnar brævasvein, / hann bað sær ei Gud til ráð. ...

Higar ið hansara snekkjan / kendi fagurt land, /
lótu síni akker falla / á so hvítan sand. ...

Og so búgvín gongur hann / í høgur hallir inn, /
sum Ívint sterki á borði sat / við monnum hundrað fimm.

かくして乙女の伝令の小姓は自分の船の準備をさせ、船のロープはすべて純金のものにさせた。……海の天候は荒れ、砂がデッキに飛び散ったが、乙女の伝令の小姓は決して神に助言を求めることはなかった。……彼の船からきれいな陸地が見えると、白い砂浜に錨を降ろさせた。……彼は広間へと向かって行ったが、そこではウイヴィントが500人の臣下達とともに卓についていたのであった。(Aヴァージョン、II、第26、31、34、37スタンザ、204-205頁)

(17) So var veður á sjónum hart, / tað brakar í hvørjum bjálka, /
valdi tað frúnnar brævasvein, / hann bað sær ei Gud til hjálpar.

Higar nú teirra snekkja / kendi fagurt land, /
kasta sínum akkerum / á so hvítan sand. ...

Tað var frúnnar brævasvein, / hann gekk í hallina inn, /
sum Ívint sterki at borði sat / við meiri enn hundrað fimm.

海の天候は荒れ、(船の) 梁はみなギシギシと音を立てたが、乙女の伝令の小姓は決して神に助けを求めることはなかった。彼らの船からきれいな陸地が見えると、白い砂浜に錨を投げ入れた。……乙女の伝令の小姓は広間へと向かって行ったが、そこではウイヴィントが500人以上の者達とともに卓についていたのであった。(Bバージョン, II, 第16-17, 19スタンザ, 222-223頁)

一方Cバージョンでは

- (18) Fimur var hann á fótunum, / sum boðini skuldi bera,
伝言を伝える者は敏捷な者であった。(Cバージョン, II, 第13スタンザ, 1-2行, 234頁)

と記され、連絡を受けた *Ívint* と彼の臣下の者達も馬で *Girtland* へ赴く。
(Liestøl 1915: 166)

この点に関してはノルウェー語バラッドはフェロー語バラッドCバージョンと共通している：

- (19) « Høyre du det, min lisle smådreng: /du springe på gangaren raude, /

du bed han Iven, bro'er min, / han skundar á hevne min daude. »
Og det var Kvikjesprakks liten smådreng, / han ri'e så radt av garde: /

「聞くのだ、我が小姓よ、赤い馬に飛び乗るのだ。我が兄弟のイーヴェンに頼み、私の死の仇を取りに来てもらうのだ。」そしてクヴィケスプラックの小姓は馬で庭を駆けだした。(第39スタンザ、第40スタンザ1-2行目、75頁)

Og det var Iven Erningsson / han kom seg riand i gård, /
og det var Girklandskongjen, / han ute fyr honom står.
そしてエルニングの息子イーヴェンは馬で庭へとやってきた。ギルクロンド王は表に出て彼の前に立っていた。(第51スタンザ、76頁)

2. 3. 4. Girtland 王とその軍勢に対する Ívint と Kvikilsprang の戦い

Ⅱの *Kvikilsprang* のクライマックスにおける Girtland 王とその軍勢に対する Ívint と Kvikilsprang の戦いを巡り、Liestøl (1915) には以下の二点の指摘がある：

① Kvikilsprang や Ívint らが Girtland 側の戦士達と戦った結果、Girtland 側で王の他に生き残った戦士の数は、A ヴァージョンでは12人であるが、C では3人である。B ヴァージョンではこの点に関する記述はない。(Liestøl 1915: 166)：

(20) Løgdu niður liðið alt, / sigst í hesum tátti, /

Girtlands kongur við sveinar tólv / stóðu eina eftir.

(ウィヴィントとクヴィチルスプラングは) 軍勢を皆殺しにした。この

ようにこのバラッドでは伝えられているが、ギルトランド王とともに生き残っていたのは12人の小姓だけであった。(Aバージョン, II, 第57スタンザ, 206頁)

(21) eftir stóð hann kongurin / við sín triðja mann.

王とともに生き残っていたのは3人の家臣だけであった。(Cバージョン, II, 第28スタンザ, 3-4行, 235頁)

② Bバージョンではこの戦闘の末、以下の引用(22)のように Girtland 王は Kvikilsprang に娘と国の半分を差し出し、Bバージョンではここで *Kvikilsprang* が終わっている (Liestøl 1915: 166-167) :

(22) » Eg gevi tær jumfrú Rósin moy / og hálvtt mítt ríki til handa. «

「娘の乙女ロウスインとわしの国の半分はそなたのものだ。」(Bバージョン, II, 第31スタンザ, 3-4行, 223頁)

Liestøl (1915) の指摘はフェロー語バラッド3バージョン間の異同のみを巡るものであるが、フェロー語バラッド3バージョン間に限ってみても、これら Liestøl (1915) で指摘された2つの点が含まれる *Kvikilsprang* のクライマックスについてはさらに、先行研究では指摘されていない3バージョン間の相違点が存在する。というのも、下記のように、Bバージョンではここで Girtland 王は「娘と国の半分を差し出す」ことで「わしの身の安全を保証してくれたまえ」と命乞いをしているのであり、この戦闘後の Girtland 王の命乞いという点に限ってはCバージョンにも見られることだからである：

23) » Mín kæri Kvikil spraki, / gev mær nú grið! «

「親愛なるクヴィチル・スプレアチよ、ここでわしの身の安全を保証してくれたまえ。」(Bバージョン、II、第30スタンザ、3-4行、223頁)

» Eg gevi tær jumfrú Rósin moy / og hálvtt mitt ríki til handa. «

「娘の乙女ロウシンとわしの国の半分はそなたのものだ。」(Bバージョン、II、第31スタンザ、3-4行、223頁)

24) » Mín kæri Kvikilbragd, / gev mær grið!... «

「親愛なるクヴィチルブラグドウよ、わしの身の安全を保証してくれたまえ。……」(Cバージョン、II、第33スタンザ、1-2行、235頁)

Aバージョンでは戦闘後に Girtland 王がこのように命乞いをするとの記述はない。

また、AバージョンとCバージョンでは Girtland 王は最後に殺されてしまう。Aバージョンでは Ívint が殺し、Cバージョンでは Girtland 王が命乞いをした相手である Kvikilsprang によって殺される：

25) Tað var Ívint Herintsson / sínum svørði brá, /

hann kleyv reystan Girtlands kong / sundur í lutir tvá.

ヘリントの息子ウイヴィントは彼の剣を抜き、豪胆なギルトランド王を真っ二つに斬った。(Aバージョン、II、第58スタンザ、206頁)

26) Tað var ungi Kvikilbragd / sínum svørði brá, /

miðjan kleyv hann Girtlands kong / sundur í lutir tvá.

若きクヴィチルブラグドウは彼の剣を抜き、ギルトランド王を中央

で真っ二つに斬った。(Cバージョン, II, 第33スタンザ, 235頁)

しかし, Girtland 王が最後に娘と自国の半分を差し出して命乞いをする Bバージョンでは Girtland 王が殺されるとの記述はない。先に引用した「娘の乙女ロウシンとわしの国の半分はお前のものだ」という王の台詞によって *Kvikilsprang* が終わっている。

以上がこの箇所を巡るフェロー語バラッド3バージョン間の異同であり, 次にこれらの箇所のノルウェー語バラッドにおける該当箇所であるが, フェロー語バラッドの *Kvikilsprang* と, これと同じ題材を扱ったノルウェー語バラッド *Kvikjesprakk* との間にはプロットの上でいくつか重要な相違がある。その1つが, フェロー語バラッドの方はどのバージョンにおいても, *Ívint* が Girtland に到着後, まず *Kvikilsprang* を解放し, この2人がともに Girtland 勢と戦って打ち負かし, その上で最後に Aバージョンと Cバージョンでは Girtland 王が殺され, Bバージョンでは Girtland 王が娘と国の半分を差し出して命乞いをするところで終わっているが, 一方のノルウェー語バラッドでは, *Iven* が *Girkklond* 到着後に早速 *Girkklond* 王を殺し, 続いて命乞いをした王の小姓も殺した後¹⁵⁾, *Kvikjesprakk* を解放し, その後彼らは *Rosamund* (*Rósinreyð*) を除き, *Girkklond* の人間を皆殺しにするという形になっており, 王の殺されるタイミングがフェロー語バラッドとは異なっているという点である¹⁶⁾。

以下詳しく見てゆくと, ノルウェー語バラッドでは *Iven* が *Girkklond* に到着して *Girkklond* 王と会うと, 王は *Iven* に「ようこそ」と挨拶し, 酒の話題を出す¹⁷⁾, *Iven* は

(27) ...eg er komen til Girkklondo / å sjå etter bro'eren min.

……私は自分の兄弟を捜しにギルクロンドへやって来たのだ。(第

53スタンザ, 3-4行, 76頁)

と告げる。そして王から

- (28) Han hev seti i myrkestoga / vel uti tjuge dagar, /
hass gangaren spring i Girklondo, / der tore han ingjen taka.
彼はもう20日以上獄に入っている。彼の馬がギルクロンド内を走り
回って、誰も手がつけられないのだ。(第54スタンザ, 77頁)

と言われると、

- (29) Det var Iven Erningsson, / han let sitt sverdet brå: /
han hoggje til Girklondskongjen, / hass hovud dreiv langt ifrå.

Det var kongjens liten smådreng, / hann fell'e på berre kne:
« Høyre du Iven Erningsson: / livet så gjeve du meg! »

Det var Iven Erningsson, / sitt sverd ville han kje øyde:
han slo til honom med neven, / så heilen skvatt på heie.

エルニングの息子イーヴェンは彼の剣を抜いた。彼はギルクロンド王に斬りつけると、彼の頭部は遠くまで飛んだ。王の小さな小姓はただ膝をついただけであった、「エルニングの息子イーヴェンよ、どうかお命だけはお助けを。」エルニングの息子イーヴェンは自分の剣を傷めたくなかった。彼は小姓を拳で殴りつけ、脳味噌が地面に飛び散った。(第55-57スタンザ, 77頁)

その後、IvenはKvikjesprakkを解放し、彼らはRosamundを除き、Girkklondの人間を皆殺しにする。

(30) Dei drápe ned i Girkklondo / både katt og hund, /
der lived ingjen etter dei, / berre fruva Rosamund.

彼らはギルクロンドでありとあらゆる者達を殺し、ローサムン嬢を除き、そこでは彼らの他には誰も生き残っている者はいなかった。(第67スタンザ, 78頁)

このように、フェロー語バラッドとは異なり、ノルウェー語バラッドではGirkklond王はKvikjesprakkが解放される前にIvenによって殺されてしまい、その際に王が命乞いをすることはない。命乞いをするのは王の小姓であるが、結局Ivenに殴り殺される。このノルウェー語版での小姓による命乞いとフェロー語バラッドBC両バージョンでの王の最後の命乞いの間に何らかの関わりがある可能性もあるが、断定的な事は言い難い。

3. 結 語

ここまで、フェロー語のバラッド・サイクル *Ívint Herintsson* を構成する5つのバラッドのうちの1つである *Kvikilsprang* について、3バージョン間で異同が見られた箇所のうち、特に主要なものを中心に、ノルウェー語バラッド *Kvikjesprakk* の該当箇所と比較してきたが、その結果、フェロー語バラッドにおいてCバージョンだけがAB両バージョンとは大きく異なり、かつそこではCバージョンとノルウェー語バラッドの内容が合致しているというケースが最も多く見られた。一方、Girtlandに到着した *Kvikilsprang* が王女と思しき女性の傍らに腰を下ろすと引き倒され、後頭部ないしは首筋を強打するという点についてはAB両バージョンとノル

ウェー語バラッドでのみ共通して見られ、また、クライマックスでの *Ívint* と *Kvikilsprang* による *Girtland* 王側との戦いの場面については、フェロー語作品とノルウェー語作品との間で大きな違いが見られ、フェロー語作品についてもヴァージョンごとに細かな相違が見られることがわかった。

そこで次稿では、バラッド・サイクル *Ívint Herintsson* の中で、*Kvikilsprang* と同様に同じ題材を扱ったノルウェー語バラッドが存在するⅣの *Galiants táttur fyrri* とⅤの *Galiants táttur seinni* について、同じように3ヴァージョン間で比較を行い、異同の見られた箇所について、ノルウェー語バラッド *Iven Erningsson* の該当箇所とも比較を行い、その結果と併せてフェロー語バラッド *Ívint Herintsson* の個々のヴァージョンの形とノルウェー語バラッド2作品の生成・伝承過程を浮き彫りにすることを目指したい。

注

- 1) 本稿は日本アイスランド学会2014年度総会（於 石川四高記念文化交流館 2014年5月10日）における公開講演原稿の一部に加筆修正を施したものである。貴重な御意見をくださった方々に感謝申し上げます。
- 2) テキストは *Ívint Herintsson*. In: Djurhuus, N. (ed.) *Føroya Kvæði*. Corpus Carminum Færoensium 5, 199-242. Copenhagen: Akademisk Forlag, 1976を使用。
- 3) 前掲（注2）の Djurhuus の版には3ヴァージョンとも含まれており、各ヴァージョンの掲載頁はA（199-218）、B（219-229）、C（229-242）である。
- 4) BヴァージョンではⅠの *Jákimann kongur* は51スタンザ、Ⅱの *Kvikils bragd* (*Kvikilsprang*) は31スタンザ、Ⅲの *Galiants táttur* は119スタンザからなる。
- 5) Ⅰについては実際の番号の表記はなく、筆者による補足である。
- 6) CヴァージョンではⅠの *Jákimann kongur* は76スタンザ、Ⅱの *Kvikilbragd* (*Kvikilsprang*) は36スタンザ、Ⅲの *Galiants kvæði* は122スタンザからなる。以後、全体としてのバラッド・サイクルを構成する個々のバラッドについては、原文の引用箇所を除き、Aヴァージョンの分け方と名称を使用する。また、作中の登場人物名もヴァージョンによって細かな違いが見られる場

合があるが、こちらも原文の引用箇所を除き、Aバージョンにおける表記を使用する。

- 7) テキストは *Kvikjesprakk (Kvikkjesprakk)*. In: Knut Liestøl and Moltke Moe (eds.), Ny Utgåve. Olav Bø and Svale Solheim (eds.) *Folkeviser* 1. Norsk Folkediktning, 69-78. Oslo: Det Norske Samlaget, 1958を使用。本作は68スタンザからなる。なお、この作品には異なるタイトルで呼ばれ、61スタンザからなる別の版 *Kvikisprakk Hermodson*. In: Landstad, M. B. (ed.) *Norske Foleviser*, 146-56. Christiania: Chr. Tönsbergs Forlag, 1853も存在する。細かな点を除き、上記のBø = Solheimの版と物語内容は変わらないが、本稿での引用箇所では、Bø = Solheimの版とは異同の見られる箇所についてはLandstadの版の内容について注記する。
- 8) テキストは *Iven Erningsson*. In: Knut Liestøl and Moltke Moe (eds.), Ny Utgåve. Olav Bø and Svale Solheim (eds.) *Folkeviser* 1. Norsk Folkediktning, 99-111. Oslo: Det Norske Samlaget, 1958を使用。本作は87スタンザからなる。
- 9) *Ívint Herintsson* に関する先行研究で、物語の素材に焦点を当てたものは以下の4点で、これらの研究では本作品におけるアーサー王物語のモチーフの痕跡などが指摘されている：Kölbing, Eugen (1875) *Beiträge zur Kenntniss der færöischen Poesie*. *Germania* 20: 385-402; Liestøl, Knut (1915) *Norske trollvisor og norrøne sogor*. Kristiania: Olaf Norlis Forlag; Kalinke, Marianne (1996) *Ívint Herintsson*. In Norris Lacy (ed.) *The New Arthurian Encyclopedia*. Updated Paperback Edition, 248-249. New York/London: Garland Publishing, Inc.; Driscoll, M. J. (2011) *Arthurian Ballads, rimur, Chapbooks and Folktales*. In: Marianne E. Kalinke (ed.) *The Arthur of the North. The Arthurian Legend in the Norse and Rus' Realms*, 168-195. Cardiff: University of Wales Press.
- 10) Liestøl, Knut (1915) *Norske trollvisor og norrøne sogor* (前掲注9)。
- 11) 引用は原文のまま。使用したテキストの頁数を記す。以下同様。
- 12) Liestøl (1915: 184-186)。Vの *Galians táttur seinni* ではÍvintの息子Galianの *Botnar norður* での冒険が描かれる。AB両バージョンでは、Hartan王が毎年クリスマスの夜に臣下を1人Botnar norðurへ行かせる習慣があったことが地の文で記されると(Aバージョン、V、第1-2スタンザ、215頁/Bバージョン、III、第79スタンザ、227頁)、Galianが自らBotnar norður行きを希望する(Aバージョン、V、第3スタンザ、216頁/Bバージョン、III、第80スタンザ、227頁)。CバージョンでもHartan王の上記の習慣をめぐる記述はあるが(Cバージョン、III-III、第82スタンザ、240頁)。

GalianがBotnar norður行きを申し出る（Cヴァージョン、Ⅲ-Ⅲ、第85スタンザ、240頁）直前に、Botnar norðurの巨人から客を連れて行くとの知らせが届いたことが地の文で記される（Cヴァージョン、Ⅲ-Ⅲ、第84スタンザ、240頁）。この点について、*Ívint Herintsson*のⅣとⅤにあたる内容が扱われているノルウェー語バラッド *Iven Erningsson* の該当箇所では、王の習慣に関する記述はないが（ノルウェー語作品ではアーサー王は登場せず、名前の登場しないデンマーク王が代役を果たしている）、小姓がやって来て、巨人が税を要求していることを告げると（第72スタンザ、109頁）、Galite (Galian) は自らが Trollebotn (Botnar norður) へ赴いて怪物を斃すと表明する（第75スタンザ、110頁）。この点で、Liestøl (1915: 184-186) は、AB両ヴァージョンと比べ、Cヴァージョンが最もノルウェー語の *Iven Erningsson* と内容が近く、AB両ヴァージョンとノルウェー語作品の中間形態と言えると指摘している。

- 13) « Gud lat meg alli liva den dag / då eg skò få deg til måg! » 「わしがお前を親族に加えなければならない日を迎えるようなことを神が決してお許しにならないように。」（第23スタンザ、3-4行、72頁）
- 14) Kvikjesprakk sette seg fruva næst / ... / han bleiv så snøgt or sesse kipt / at nakkjen small i fjalar. クヴィキェスプラックは婦人の隣に腰を下ろした。……すると彼はすぐに席から引き下ろされ、床で首筋を強打した。（第25スタンザ、1行、3-4行、73頁）
- 15) 詳しくはこの後の本文で引用している箇所であるが、Landstadの版では、Eivind (*Iven*) がJutland (Girkland) 到着後に王から、Kvikisprakk (Kvikjesprakk) がもう20日間獄に入っており、彼の馬がJutland内を走り回って、誰も手がつけられない旨を聞かされると、EivindはJutland王との一騎打ちの末、王を斃す。その後、Eivindに命乞いをした王の小姓を、自分の剣を傷めたくないEivindが拳で殴り殺す点はBø = Solheimの版と変わらない。（Landstad (ed.) *Kvikisprakk Hermodson* (前掲注7)、第42-54スタンザ、153-155頁）
- 16) この、フェロー語作品とノルウェー語作品の間で王が殺されるタイミングが異なる点についてはLiestøl (1915: 174) でも指摘がある。この点の他にフェロー語の *Kvikilsprang* とノルウェー語の *Kvikjesprakk* の間に見られるプロット上の相違については既にKölbing (1875: 401) およびLiestøl (1915: 169-171) において指摘があり、特に主なものとして挙げられるのは、Kvikilsprang/KvikjesprakkがGirtland/Girklandに到着してから捕らわれの身になるまでの経緯である。ノルウェー語の *Kvikjesprakk* で

は、Kvikjesprakk が Girkland に到着後、王女への求婚の意志を Girkland 王に伝えると王から嘲笑されるが、その後、王の小姓は獅子を放して獅子に Kvikjesprakk を殺させようとする。しかし Kvikjesprakk は両手で獅子の顎を掴み、その間に Kvikjesprakk の小姓が獅子を斬り殺す。すると今度は Girkland 王の小姓は Kvikjesprakk にある飲み物を飲ませ、Kvikjesprakk が眠り込んだところで Kvikjesprakk は牢獄へと連れ込まれ、手枷、足枷がはめられる。その後、Kvikjesprakk は自らの小姓を Iven のもとへと向かわせるが、この Kvikjesprakk が牢獄に入れられるまでの獅子と飲み物のエピソードはフェロー語の *Kvikilsprang* ではどのヴァージョンにも見られない。なお、この獅子と飲み物のエピソードは、ノルウェー語作品では Bø = Solheim の版、Landstad の版のいずれにも存在する。(Bø = Solheim (eds.) *Kvikjesprakk* (前掲注7), 第32-38スタンザ, 74頁 / Landstad (ed.) *Kvikisprakk Hermodson* (前掲注7), 第22-29スタンザ, 150-151頁)

- 17) « Velkomen Iven Erningsson, / velkomen hit til min! / No hev eg sta'i den vårsdag lange / og blanda mjø' i vin. » ようこそ、エルニングの息子イーヴェンよ、ようこそ、ここ、わしのもとへ。長い春の間かけて蜂蜜酒をワインに混ぜてきたのだ。(第52スタンザ, 76頁)

